

話をいろいろ拝聴していると、KH Vが業界に蔓延していて治療法も確立されていないし、その他の魚病治療にも主に薬品を使用しているのが現状であることを教わりました。抗生物質を使つての治療は必ず抗体ができますので、「イタチゴッコ」になりません。

—— 薬は使わないほうがいいんですね。

池田 乳酸菌は自然の中で生きていますし、このミラクル・アニマルの材料も乳酸菌を主体にして、自然の植物や海藻からエキスを抽出し、長期醗酵熟成させた商品です。ですから病気に罹らないように日頃の健康管理を心掛けた飼育が大切です。

—— 絵原さんがされた実験はどのような方法ですか。

絵原 最初に始めたのは今年（平成十七年）の三月からです。まず、致死量がどのくらいかを調べるために二百五十倍、五百倍、一千倍に分けて水槽薬浴と同じ方法でやりました。そのデータは記録しておりますが、エロモナス菌（穴アキ病）に効果がありません。使い始めてしばらくすると、目を追って潰瘍的な物がなくなつて

いく状態が目に見えてわかりました。ただ、薬浴は大型池では効率が悪い（費用対効果）ので、飼料に添加して与える方法が一般のお客様には使いやすいと思われました。

—— どんな使用方法ですか。

絵原 餌に混ぜる場合は五百倍と聞きましたが、何度もやつているうちに計るのが面倒臭くなつて、だんだんと濃度が高くなりました。古藤さんには四月から使つていただいています。

—— 実際に使われてどうですか。

古藤 病気に罹りにくくなるのと、とで、最初は五百倍の希釈液を餌に浸しましたが、それを乾燥させるのに一晩掛かりましたので、いまでは噴霧器でやつています。しかし、与えるうちに池が真っ黒になつて鯉が見えなくなりました。

—— その原因は何ですか。

田中 材料的なことが九九%ありますね。濃度が濃すぎたのが大きな原因です。

古藤 しかし、私が一番びっくりしたのは、鯉の伸び率が全然違うことです。内臓が丈夫になつたのか、餌を多めにやつても何の障害も出ない

です。野池から揚がつた鯉と比べてもまったく変わらないほど伸びました。体形も狂わず、ポリウムも付いたし、来年から野池に入れずこの乳酸菌だけで十分じゃないかな。預け代もいらないし……。〈全頁爆笑〉

—— 古藤さんの池の水量はどのくらい……。

古藤 FRP水槽と十二tの泉水があります。両方で使つていますが、病気がまつたく無くなりました。泉水には四十五cm以上七十cmくらいの鯉が三十五本入っています。今年になつて一度も池を消毒したことがありません。水槽でも大きくなりますね。

—— 給餌の回数。

古藤 泉水の鯉には毎日三回で、一回あたり手掴みで八つくらい分を与えます。いまは濃度を二十倍くらいにしてやつていますが、あれだけ餌を欲しがるのは初めてです。

—— 冬場はどうですか。

古藤 今年（十二月二日現在）も水温十五℃まではやりましたが、飛び付き方が違います。春先の餌付けに使用すれば最高だと思えます。

—— 嗜好性が高いということですね。

池田 そういうことですね。また、乳酸菌というのは主に十五℃以上で活性するんです（十五℃以下でも活性する菌もいます）。鯉には胃がなくて腸だけで消化していますね。乳酸菌が消化吸収をかなり助けていると思います。だから乳酸菌で大きくなるのではなく、餌をたくさん食べても消化吸収率が非常に良いので餌の持つている栄養価を鯉に直接与えることになり、よつて鯉が大きくなるのです。ですから、補助的な物、サ



ホテルの一室で行なわれた